

IV まとめ

さて本章では、前章までにおいて解説を加えた遺構や遺物の時期を整理し、遺構の性格について検討を加えることにするが、対象となると考えられる市内における14～16世紀の土器編年はいまだ不明瞭な点が多いため、詳細な時期比定が困難となっている。特に遺物の大半を占める土師質土器については不明な点が多く、時期決定の多くは14世紀までの整理が充実している太宰府の状況や出土量が少なく破片資料の多い陶磁器類に頼っている状況である。しかし近年、当該時期の遺跡調査が増加しており、資料が蓄積されつつある。そこで、これらの資料を用いて、土師質土器の変遷について整理し傾向の抽出を試みたい。これにより、遺構の大半を占める出土土師質土器を用いて、概ねの遺構の変遷を捉え、慈眼山遺跡を評価する手がかりとしたい。

(1) 日田市内出土の14～16世紀の土師質土器の変遷と年代

まず、市内における14～16世紀の土師質土器の変遷を整理するにあたり、これまでの研究成果を整理する。日田市内の当該時期の土師質土器編年の最も古いものとして、田中氏によって2次調査の報告時に遺構の層位関係を軸に15世紀後半～16世紀前半の編年が試みられている（田中1991）。基本的には色調に基づく分類ではあるものの、器形や法量・調整とも合致し、体部の内湾する淡褐色系の坏（B1類）が、やや内湾気味ではあるものの体部が直線的になる過渡的形態の坏（B2類）を伴いながら、器肉が薄く体部が直線的に伸びて口径に対して底径の小さな淡褐色系の坏（C類）へと変化すると捉えている。そして、共伴遺物の存在などから概ね15世紀後半から16世紀前半に該当するものと想定している。このような想定に対し、4次調査の報告などにおいて、行時氏が12～16世紀までの市内の遺跡出土資料を用いて編年観の整理（行時2000・2001）を試みている。うち、15～16世紀に関しては、主に坏の形態変化と調整の変化に着目し、C類は調整が丁寧で器形のバランスが良く、B類はつくりが雑な点が特徴として考えられるとして、C類からB類への変化を想定し、C類を概ね15世紀後半、B類を16世紀前半と田中氏とは逆の傾向を提示している。両者は変化の方向性については大きな相違があるものの、収まる大枠の時期や分類についてはほぼ合致しているため、余計に混乱をきたしており、その後発表された各報告においては概ねの所属時期はこれらの案を踏襲するものの、詳細な時期比定は避けている状況と言える。また、14世紀後半から15世紀後半については、上井手遺跡において若杉氏が特徴を抽出するものの、その変化傾向までは踏み込んではいない。（若杉2007）

さてこのように、各遺構から出土した遺構毎に特徴は語られるものの、全体を通した傾向は抽出されておらず、またそれぞれの時期比定や変化傾向に混乱が生じている状況が一部見られるようである。その問題点としては、①対象遺物の一括性の検討がなされていない場合がある②分類基準が器形・調整・法量・色調のうちどれに重きをおくかで異なっていると共に、それらの分類属性が明確に峻別可能なものではないため、相互の意図する分類基準の理解が混乱している③各分類は同一系譜上で変化するものと捉えている④変化の方向性の決定根拠が、層位等と精粗差のどちらに重きをおくかで異なっているといった点が挙げられる。

本来であればこれらの問題点をクリアする器種設定と分類基準を作成し、属性毎の傾向を数値化した整理が望ましいと思われるが、技法上の微細な変化を属性として抽出するかどうかの判断が難しいうえ、比較的一括性が高いと判定する一定量の遺物が出土している遺構を対象とした場合、変化方向を明確に証明する層位関係を有する資料やクロスチェックの対象と出来る広域土器を有する資料は思ったほど多くはないという現実がある。そこで今回の手法としては、器種分類は行わず、近年14～16世紀の整理が進んでいる豊後や筑前地域などにおける土師質土器編年を参考としつつ、一括性が比較的高いと思われる遺物毎に切り合い関係などを重視しながら変化方向を概観することとする。そのうえで、陶磁器等の広域分布土器や年代比定の可能な遺構を利用して、概ねの年代観を提示することに留めたい。

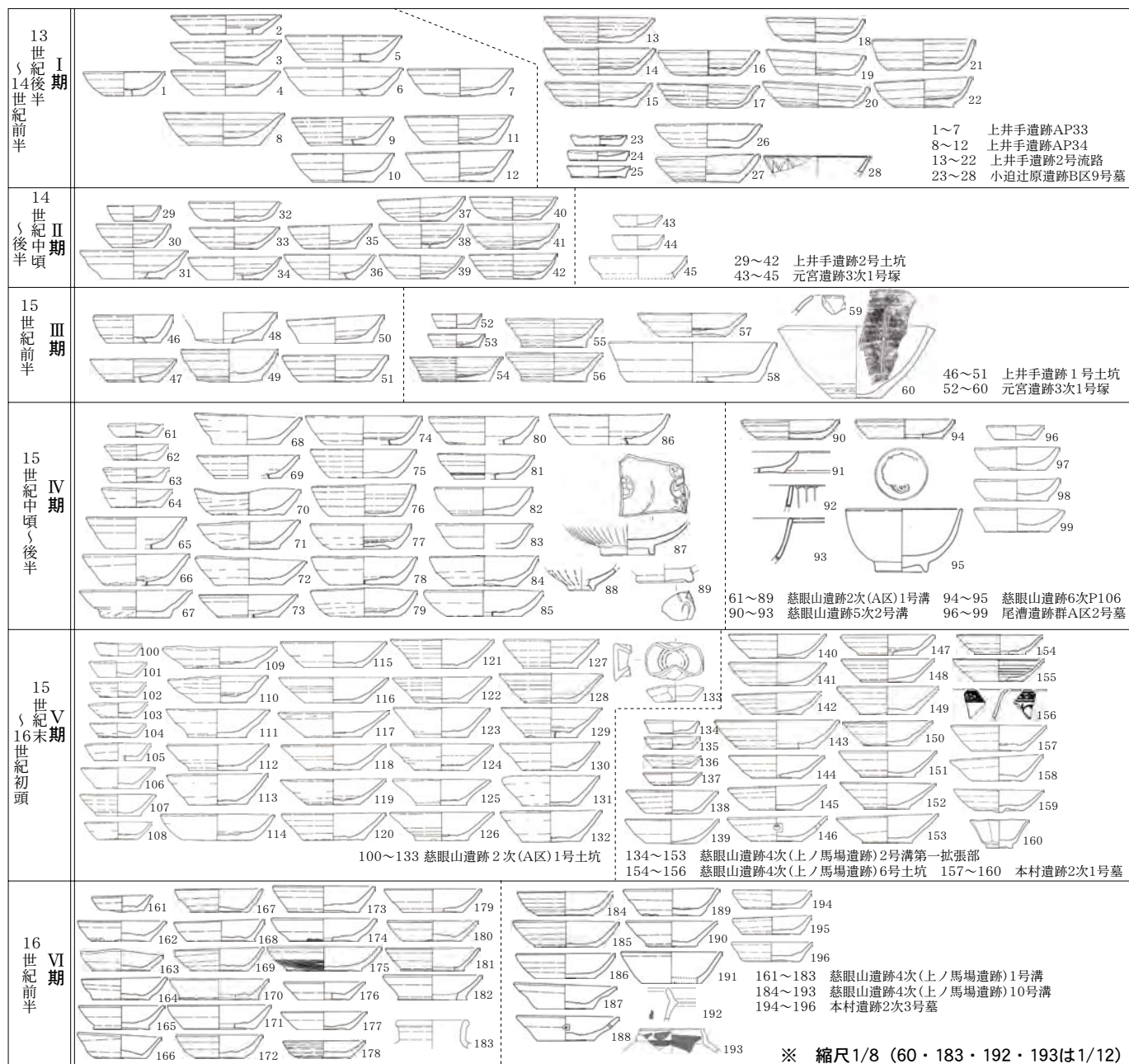
さて、上記方針に従いまとめたのが第19図の素案である。概ね6箇所の一括資料と類似資料を用いて区分した。I期には、年代比定可能な資料を有する遺構が見られないものの、一括性の高い標識資料として埋納遺構である上井手遺跡AP33・34の1～12を想定した。切り合い関係からAP33が古く、AP34が新しい。坏のなかにも1のやや小型、2～4の直線的に口縁部が外に開くもの、5・6・8・9の口縁部が直線的に開くもののやや深型のもの、10～12の深

型でやや内湾気味なものなど複数のタイプが見られる。⁽⁷⁾法量では1が口径10.4・底径4.8・器高3.1cmで、それ以外は平均値で口径14・底径8.7・器高3.5cmを測るやや大型の部類である。ただし、AP34の方が若干小型であるため、この型では新しくなるにつれて小型化する可能性が考えられる。また、これらの器形に類似するものを持つ類例としてやや一括性は劣るものの、上井手遺跡3次2号流路一括埋納遺物13～22が挙げられる。10～12のように若干内湾気味の坏13～15などが見られる一方で、体部下端に丸みを残して湾曲して立ち上がる器形の異なる一群16～22が伴っている。前者が口径13.9・底径8.9・器高3.2cmとAP33・34例とほぼ同数値であるのに対し、後者は口径12.8・底径8.3・器高3.3cmと径が小さい。後者の一群が前川（1978）Ⅱ-3～4期（13世紀）、坪根・塩地（2001）の13-I期に類似する器形であることから、やや古い時期の一群と捉えておきたい。そのほか小迫辻原遺跡B区9号墓23～28の坏26・27も上井手AP34例と類似していることなどから、ほぼ同時期と考えられよう。ただし、23～25の小皿は伴うものの、28の青磁碗（大宰府分類Ⅱ-b類）は棺外副葬等の流れ込みとの報告のため、共伴性は低いと判断した。以上のような特徴を他地域と照らし合せ、Ⅰ期を概ね13世紀後半から14世紀前半の間に置くが、検証可能な遺物が乏しいため、明確な時期比定は出来ない。なにより、今回の主眼はあくまで14～16世紀の変遷であるため、ここではその前段階の傾向を述べるに留めることとしたい。いずれにしてもⅠ期の中では上井手3次2号流路が比較的古く、それに上井手AP33、AP34の順番で続き、小迫辻原例はAP33・34と同時期と捉えておきたい。

続く時期のⅡ期には、上井手遺跡2号土坑を想定した。Ⅰ期で見られたやや小型の30や口縁部が直線的に広がる31のタイプが見られると共に、深型の小皿29や体部が外に開くものの内湾して立ち上がる一群33～42が多く伴うようになる。また、31が口径14・底径8.2・器高3.5cmと前時期とあまり変わらないのに対し、33～42の一群は口径11.4・底径6.9・器高3cmと大幅に小型化していることが特徴と言える。Ⅰ期のAP33⇒34の傾向もやや小型化を示していたことを考えると、小型化し、内湾気味の器形が増えると想定される。さて、このような特徴に該当するものとして元宮3次1号塚出土遺物が挙げられる。44は29と類似し、45も口縁部内湾の一群と想定される。この元宮3次1号塚上には笠塔婆が建てられており、後世の紀年銘ではあるが観應元年（1350）と刻まれている。確実な共伴を示すものではないものの、一定の年代観を提示する資料と評価できるようである。このことから、Ⅱ期は14世紀中頃～後半頃と捉えておく。

次のⅢ期には上井手遺跡1号土坑を想定した。Ⅱ期で見られた体部が外に開くものの内湾して立ち上がる46に、Ⅱ期の30のような器形がさらに深型化して体部が上方に立ち上がるタイプ47～49が伴うようになる。また、あまり深型ではないが体部が上方に立ち上がる50・51の一群も伴う。46は口径11.2・底径6.6・器高2.9cmとⅡ期と大きく変わらないが、47～49は大きさが異なるものの、口径が9.6～12.4の間で器高は3.6～4.6とかなり深型である。50・51でも口径13.3・底径9.4・器高3.5cmと底径が広がっていることを示している。また、Ⅱ期までにはさほど見られなかった特徴が調整において見られ、内底面にヘラ状工具による輪状の痕跡が観察されるものが増加する。さて、このような特徴に該当するものとして、一括性は低いものの上井手遺跡2号溝が想定される。体部が直線的に上方に立ち上がる1・2の小皿と共に、口縁部が直線的に上方に立ち上がる54～56の一群が伴う。そのほか57の直線的に体部が外に開くものと体部が上方に立ち上がる大型坏の58、59の片彫り蓮弁の青磁碗及び60の備前系播鉢が伴う。このうち60の備前系播鉢は間壁分類の15世紀のⅣ期（1990）でもやや古い時期と想定される。従ってⅢ期は15世紀前半に比定されるものか。

続くⅣ期は慈眼山遺跡（2次）A区溝埋土下層の遺物を想定する。下層出土と言うものの、溝の出土であるためやや一括性は劣る。61～64の体部が上方に立ち上がる小皿の一群や65・66のように深型で体部が上方に立ち上がる一群が見られ、Ⅲ期との連続性が認められる。また、前時期に見られた57に類似する体部が直線的に外に開く一群67～73と50・51に類似する深形で体部が内湾気味に上方に立ち上がる一群74～79が増加する。前者は口径13.2・底径8・器高3.2cmを測り、後者は口径13.4・底径8.5・器高3.5cmと底部が広くやや深型である。そのほか体部が広がり内湾する一群には80～83のやや小型（口径12.6・底径7.6・器高3.3cm）と84～86の大型（口径14.5・底径9・器高3.6cm）の2種類が見られる。調整はⅢ期と同じように内底面にヘラ状工具による渦状ナデ痕跡が観察されるものが半数以上を占めている。これらの土師質土器には上田分類のB-Ⅳ類に相当する87～89の龍泉窯系青磁碗が伴っており、15世紀後半以降と想定されよう。さて、このような特徴に該当するものとして慈眼山遺跡5次2号溝、慈眼山遺跡6次P106が挙げられる。



第19図 土師質土器の変遷素案

90・91・94は体部が広がり内湾する小型の一群に該当するもので、他には92の細描蓮弁文で剣先が意識されていないものや93・95の無文で体部が丸みを帯びる青磁碗が伴っており、87～89の青磁とほぼ同時期と見てよいだろう。そのほか体部が広がり内湾気味の坏と類似する特徴を有するもので尾漕遺跡群A区2号墓出土の坏が挙げられる。この2号墓に副葬された六道銭の中には朝鮮通寶（1423年铸造）が含まれており、入手の期間等も加味すると15世紀中頃の埋葬年代が想定される。以上の点から、IV期は15世紀中頃～後半と比定する。

V期には慈眼山遺跡（2次）A区1号土坑を想定した。浅い土坑に一括廃棄された可能性が高く、層位的にもIV期の標識遺構より後出することは確実である。小皿35～44はIV期に類似しつつも、体部がやや外に開くものが多く見られる。杯はIV期に続き浅く体部が直線的に外に開く一群109～113が見られるが、開き方がやや大きいようで、口径13.1・底径7.2・器高3cmと底径がやや小さい。また、口径が大きく深型の114も同様に見られる。しかし、なにより特徴的なのは、115～132の底部が狭く、器肉の薄い体部が直線的に伸びて外に開く一群が見られることで、これらは115～120のやや浅いタイプ（口径13.1・底径7・器高3.2cm）と121～132の深いタイプ（口径12.6・底径6.7・器高3.4cm）に分かれるようである。色調も橙色系が少ない上に器肉も薄く、また、調整もIV期までに顕著に見られた内底面の渦状ナデが殆

ど見られない。そのため、明らかにこれまでの土師質土器とは系譜の異なるものと想定され、豊後や博多でも顕著に認められる所謂大内系土器の影響によって出現する一群と捉えて差し支えないものであろう。日田氏が太友姓であった時期とも凡そ合致することから考えても、大きな影響を受けていた可能性は高いと考えられる。そのほか、このような特徴に該当するものとして一括廃棄と想定される上ノ馬場遺跡（4次）2号溝第1拡張部出土の一群134～153が合致し、また同6号土坑からは口縁部端反で、外面には牡丹唐草文や蔓唐草文、内面には四方樺文が施された小田分類（1982）碗B群に該当する明青花156が伴っている。また同様に、本村遺跡2次1号墓出土資料の157～159は形態的に類似しており、160の森田分類（1982）D類に該当する多角杯が共伴している。以上のように、共伴する青花や白磁では15世紀代と捉えられるものの、豊後での編年を考慮すると15世紀でも末頃で、次の土器群との関係を考慮して16世紀初頭頃と比較的短期間を想定しておきたい。

Ⅶ期には上ノ馬場遺跡（4次）1号溝を想定した。一括性はやや低いものの層位的にはⅤ期の2号溝第1拡張部に後出する。161の小皿に162～166のやや小型の杯が伴い、口縁部が内湾気味に立ち上がる167～171の杯が見られる。また、体部が直線的に開くものの底部は広く、口縁がやや内湾する73～75・79～82の一群（口径12.8・底径8.6・器高3cm）と小型の76～78の一群（口径10.6・底径6.3・器高2.5cm）が見られ、Ⅴ期の影響を受けたと想定される器形は呈しているものの、Ⅳ期の器形や調整にも類似し、内底面にヘラ状工具による渦状ナデ痕跡が観察されるものが増加する。複数のタイプが見られ、調整も異なることから、大内系土器の影響が在地土器製作に反映され成立したものと想定したい。また、これらの土器には間壁分類（1990）Ⅴ期の壺が共伴している。同様な特徴を有するものには上ノ馬場遺跡（4次）10号溝184～191があり、やはり多様なタイプが出土し、口縁部に明瞭に平坦面を作り出す間壁分類（1990）Ⅳ期後半～Ⅴ期の播鉢が共伴している。また、本村遺跡2次3号墓94～96はⅤ期の1号墓を切っている。以上の点から、Ⅵ期は16世紀代と考えられるが、染付類が全く認められないことから、全国的に流通し大量消費される中頃以前の前半期と見ておきたい。近隣の玖珠町伐株山城跡では、染付類は16世紀中頃前後から主体となっている点を考慮しても妥当と思われる。

以上のように概ね6時期に分類してその特徴を述べた。その傾向については、大まかにはサイズの縮小化や器形の変化、バリエーションの増加や調整の変化などが指摘できるが、全体的にほぼ同一の変化傾向を示しているわけではないようである。従って、今回把握出来た傾向としては、Ⅴ期などに特徴的なように、あるタイプが増加もしくは出現すると言った相対的な状況で理解されるものと考えておきたい。

(2) 7次調査の遺構の時期

さて、前項の土器変遷素案をもとに、本調査の遺構時期を比定する。まず、切り合いからも最も古いと想定される1号掘立柱建物の土器はⅣ期に該当するものと思われる。第9図9の口縁端反りの青磁碗はやや古いものか。次に切合から1・7号溝が続き、土器の特徴もやはりⅣ期に該当する。1号建物と1・7号溝の土師質土器に大きな違いが見られないため、時間差はあまりないものか。備前焼Ⅳ期の口縁端を折り曲げた玉縁口縁を持つ第9図10の甕や口縁端部に平坦面を作出する第9図29の播鉢の存在からも、やはりⅣ期でもやや古い時期を想定しておきたい。また、2号土坑もさほど差のないⅣ期と想定され、1号溝と並走し、一部7号溝を切る3～6号溝も、内湾気味の杯の特徴からⅣ期に該当するものと想定する。

3号土坑、3号建物は土師質土器の特徴からⅤ期に相当するものと思われる。次に、土師質土器ではⅥ期の特徴を持つ8号溝が挙げられる。ただし、第11図32・50・51は明らかにⅤ期の特徴を有しており、また共伴する62～64の備前系播鉢は間壁編年のⅣ期後半頃に見られる特徴を有している。66の青磁碗は蓮弁が繋がっておらず、小野編年（1982）青磁蓮弁文碗B群に該当するもので14世紀末～15世紀後半のものか。太宰府分類杯Ⅲ類よりかなりあつぽったく退化した印象を受ける67の青磁杯は、ほぼ同時期のものと思われる。以上の点を考慮して、8号溝は概ねⅣ期15世紀末頃～Ⅴ期の16世紀前半に当てはまるものと考えておきたい。

9号溝はその特徴からⅥ期に該当するものか。同様に切り合い関係上新しい2号建物・1号柱穴列・1号土坑は土器の特徴からⅥ期に該当するものと捉えたい。以上の検討から、概ね本遺跡の該当時期は15世紀中頃～16世紀前半に